

見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

March 2022 vol.95

March						
S	M	T	W	T	F	S
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

◆ 渥美半島の海食崖

所在地：田原市南神戸町^{かんべ}ほか

交通：豊橋鉄道渥美線「神戸」駅 南 約 6km

渥美半島の太平洋岸には、「片浜十三里」と呼ばれる風光明媚な砂浜が広がっており、サーファーや釣り人が県内外から訪れます。表浜とも称されるこの砂浜の背後には、高さ 10m から高いところでは 70 m にもなる海食崖が東西に連続しており、かつて砂浜付近にあった集落や街道は、宝永地震の大津波の被害を受け崖上の高台へ移転したという歴史があります。南海トラフ地震といえは海岸に押し寄せる大津波をイメージしますが、渥美半島の海食崖もまた、地震のたびに大規模な崩落を繰り返していたのです。

昭和 19（1944）年の昭和東南海地震に遭遇した住民の神戸海岸での体験談です。「地区民が総出で地引き網をしていた南町海岸でのことです。突然、地面からゴォーという地鳴りが聞こえ、海岸全体に土煙が立ちこまりました。…煙が去り、私の目の前に現れたのは、海岸線の至る所で大規模な崖崩れが発生していた情景です。」「東南海地震でホウベの崖がたくさん崩れた。三軒屋（東神戸の東端・六連百々境）から海に行く道もあったが、行けなくなった。東ヶ谷（東神戸）では、今は西島から海岸に下りる道路（自動車も通行可）が一本だけになった。崩れる前には崖のノリ（斜面）には、小さな松の木などが生えていた。」

昭和東南海地震から 3 日後に米軍が撮影した南神戸の空中写真（右段）を見ると、地震により海食崖が全て崩落し、崩れた土砂が砂浜まで広がっている様子がわかります（白く写っているのが崩落した海食崖と砂浜に広がる土砂。波

打ち際の薄い灰色が砂浜と考えられる）。同様に、米軍が撮影した渥美半島の空中写真に、大草～六連海岸の海食崖が全て崩落していた様子が残されています。また、最新の空中写真と地番図から新旧の一带を比較すると、海食崖の崩壊により、崖上の旧表浜街道から海に下りる道がすべて失われていることもわかります。



米軍が撮影した南神戸の空中写真
（「渥美半島 太平洋岸の海岸線を追う」より）

安政東海地震についても、東ヶ谷村（東神戸）の村民が記した『神戸記』（1907）に次のような記録が残されています。「安政元年（1854）11 月 4 日、大地震。…此日たるや、漁夫は網を引付おり候が、地震の為、浜の欠（崖）は裂け、浜辺は白煙となり、広き所数十間も欠込崩れ、弥々皆死を覚悟、浜にて一同大念仏を唱え、陸へ帰ること不能。無據、東百々村井戸谷へ行き、これより上陸し、いずれも其の場がり道に困難したが、漸く衆人我家へ帰り、然れ共、微震未だ止まらずして、海面大いに轟き、一見すれば南大王崎より大山の如き大ツナミ、東の方より同じく大ツナミ、其の前凡そ海面二十丁位潮干となり、然る所、東西より斜に大ツナミ寄来り、欠六七合迄海となり、是をツナミと言ふ。」

安政東海地震でも、地震により海食崖は土煙とともに崩落し、海食崖上に通じる道がすべて失われた様子が描かれています。大津波を除けば、昭和東南海地震と極めてよく似た状況が発生していることがわかります。



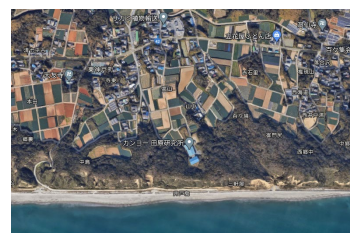
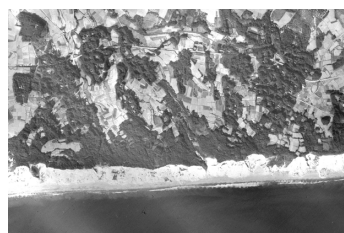
◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していたくとも、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

このように、南海トラフの地震が発生するたびに、赤羽根～六連海岸では「浜の崖が土煙を上げて欠け崩れる」ような海食崖の崖崩れが繰り返され、また、城下～七根海岸では「山が崩れて海中へ押し出される」ような海食崖全体の大規模な崩落が起こってきました（2021.6月号参照）。

「渥美半島太平洋岸の海岸利用の実態と津波防災に関する調査研究（2004）」では、次のような災害シナリオが示されています。「暑い夏の週末、予知なしに大地震が発生した。海岸には1kmあたり100人以上の人出があり、その多くはサーフィンを楽しんでいた。地震の轟音とともに砂煙をあげて一斉に崖が崩れはじめた。崖の前の道路にひしめきあって停めてあった車のいくつかは土砂に埋もれて動けなくなっている。海岸へのアクセス道路脇の崖も崩れて道路は通行不能になってしまった。海岸に設置してある警報装置がけたたましく鳴って避難を促している。岸にいた人々は、はじめ車で逃げようとしたが、道が塞がっていることを知って車をあきらめたようだ。海でサーフィンをしていた人々はしばらくして異変に気づき一斉に海岸を目

指して走ってきたが、その時にはすでに潮が引き始めていた。海岸に孤立した人々は必死に崖の上に避難しようとしているが、崖は崩れやすく、思うように登れない。そのとき、はるか沖合に波頭を白くした津波の壁が見えた。」

直近の昭和東南海地震から70年以上が経過した現在では、崩落した海食崖に緑色の植生が回復し、崖崩れの様相は消し去られ、災害の記憶は薄れつつあります。しかしながら、次に南海トラフの地震が発生したときにも、これまでと同様、大規模な海食崖の崩落が発生する可能性があります。現地を訪れる際には、そうしたことも頭に入れ、津波からの避難行動をイメージしておくことが大切です。



東神戸～百々の海岸付近の様子
（左：昭和19年12月10日、右：2020年（Google Maps）
（「渥美半島太平洋岸の海岸線を追う」より）

★伊良湖温泉交流サミット

2020年11月、田原市伊良湖町で温泉が湧出しました。2022年4月の配湯を前に、3月26日（土）に渥美文化会館で「伊良湖温泉交流サミット」が開催されます。全国で2万人以上が資格を取得しているといわれる温泉ソムリエなど、温泉愛好家が参加し、基調講演やパネルディスカッションが行われ、新たな温泉地となる田原市を全国へ広く発信します。



サミット後には、参加者による交流会や、伊良湖温泉の手湯体験のほか、夜にはオプション体験として、日本一の産出額を誇る電照菊ハウスと、トロピカルフルーツのジャングルを見学する渥美半島満喫ナイトツアーが催されます。なお、サミット開催日から、伊良湖ビューホテルにて、伊良湖温泉の日帰り入浴が始まります。

あいちの農産物

ちんげんさいは、日本で最も定着した中国野菜で、1970年代に日本に入ってきました。中華料理には不可欠な野菜のひとつですが、クリーム煮など洋風料理にも使われます。かつおぶしとしょうゆを少々かけると、すっきりした味のおひたしになります。淡泊でくせがなく、幅広く使われる食材です。



JA あいち中央 HP より

愛知県内の主な産地は田原市、安城市で、2月から3月に出荷のピークを迎えます。

●ブレイクタイム●

♪表浜ほうべの森

表浜ほうべの森（谷ノ口公園）は、田原市南神戸町の太平洋を臨む表浜海岸のすぐ近くに平成29年4月にオープンした公園で、豊かな自然の中でキャンプやバーベキューなどを楽しむことができます。キャンプ場には、日帰り・宿泊用の野営場や炊事棟があり、かまどやピザ窯も完備するほか、多目的ホールや会議室、研修棟も併設しています。キャンプ場から見下ろす太平洋は絶景です。



表浜ほうべの森 HP より

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆県内の歴史地震記録をホームページで紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『歴史地震記録に学ぶ 防災・減災サイト』（<http://www.pref.aichi.jp/bousai/densho/index.html>）をぜひご覧ください。

（発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター 2022年3月）